



ピッポ新聞

2008

4

No.230

年間購読料(送料込み)1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

追悼

石井桃子さん

石井桃子さんが4月2日に亡くなったことを新聞報道で知りました。百一歳だったという。

「石井桃子」の名は、子どもの本の世界に少しでも興味ある者ならば、必ずどこかで行き当たる名前です。戦後の子ども本の世界では、それほど大きな存在でした。

絵本や児童文学の訳者として、あるいは「かつら文庫」という実践を通じた家庭文庫や児童図書館の理論的な支柱として、また、戦後まもない時期に「岩波少年文庫」(1950年発刊)や「岩波こどもの本」(1953年発刊)を世に送り出した編集者として、さらに「ノンちゃん雲に乗る」などの作家として、そのはたした役割はかきりなく多いし、大きかった。

『くまのプーさん』(AA・ミルン)、『ピーターラビットのおはなし』(ビアトリックス・ポター)、『ちいさなつなごちゃん』(ディック・ブルーナー)、『ちい

さいおうち』、『せいめいのれきし』

(バージニア・リ・バートン)、『サリーのこ

けももつみ』、『海へのあさ』



『プー横丁にたった家』石井桃子・訳 岩波書店

(ロバート・マックロスキー)、『ムギと王さま』(エリナ・ファージョン)……。子どもの本に興味があるひとは、これらの作品のいくつかは必ず読んでいると思います。また、興味が余りない人でも、一つや二つは耳にしたことがあることでしょう。そう！これらが石井桃子さんが翻訳した子どもの本です。

石井さんが『くまのプーさん』を初めて翻訳して世に出したのが1940年(岩波の『雑誌』「図書」1995年6月号の岩波少年文庫創刊四十五年の「石井桃子さんに聞く」による。ちなみに「プー横丁にたった家」は1942年だそうです)と言いますから、まだ戦時中だったのです。すでに六十年以上も経っているわけです。『くまのプーさん』だけでなく、ほかの本も出版されてからすでに、三十年から五十年以上経ったものばかりです。

驚くことに、これらの本のほとんどが、今もピッポの棚の定番中の定番であり、現役バリバリです。ぼくもピッポの店主として、お客さんに「どんな本がいいのですか?」と、問われれば、これらの作品を躊躇なく挙げています。

このことは、石井さんの子どもの本を選ぶ、優れた鑑識力をなによりも物語っているのではないのでしょうか。

石井さんは『子どもの図書館』(岩波新書・現在品切れ)で、「かつら文庫」にやってくる子どもたちといっしょに本を読む(読んであげる)ことを通じて、子どもはどんな内容の本を面白がり、どんな内容の本にあまり興味を示さない

かを、子どもから謙虚に学び、冷静に分析し、子どもの本にはどんな要素が必要かを語っています。

この『子どもの図書館』が出版されたのは、1965年ですが、このなかで語られている、子どもと子どもの本についての内容は、今でもなんら訂正する必要がない素晴らしいものだ、ぼくは思います。近頃のステレオタイプで、へんちな子どもの本の案内書に比べて、いかにすぐれているかを強調してもしすぎることはないのです。

さて、この『子どもの図書館』は現在品切れ中ですが、はたして版元の岩波書店は再版するかどうか？、ぼくは個人的にとっても興味のあるところです。

と言うのも、この本の中で、石井さんは『ちびくろさんぼ』について、一章を設けて、自身の全訳をつけて、この作品が子どもの本としてどんなに完璧であり、優れているかを解説しています。(この解説は、子どもという存在と子どもの本の関係がとも良く理解できる内容です。)

ご存知のように、岩波書店はアメリカで『ちびくろさんぼ』が人種差別だと問題化したことで、いち早く絶版にしていまいしました。まあ、いわば「臭い物にふた」をしてしまったのでした。(石井さんがこの本を出版したときは差別問題などアメリカでも問題になっていなかったのです。)

ぼくはこれを再版して欲しいのですが、岩波書店は、はたして重版するのでしょうか？

すみません。話が横道に逸れてしまいま

した。

石井さんは、この『子どもの図書館』の前書きのなかで次のようにかたっています。石井桃子さんへの追悼の意を込めて、最後に引用させていただきます。

子どもが本(文字)の世界にはいつて得る利益は、二つあると思います。一つは、そこから得た物の考え方によって、将来、複雑な社会でりつぱに生きてゆかれるようになること、それからもう一つは、育つてゆくそれぞれの段階で、心の中での新しい世界を経験しながらおおきくなつてゆかれることです。このあとの方は、前のことにもましてたいせつだと思ふのは、こうした世界を通らないと、たいへん欠けたところのある人になるらしいからです。・・・しかし、想像力が、いまほど必要な時はないのではないでしょう。その世界に幼いうちにたのしくはいつてゆき、人間らしく育つてゆくにはどうしたらいいのか、それを本と結び付けて考えたい、・・・。

『冥福緒をお祈りします。』

一面の『プー横丁にたつた家』の画像は、岩波書店から、この3月に出版された八十年記念出版版です。横組みで、挿し絵はすべてカラーで、きれいな装丁です。定価2835円(税込み)。なお、文中で、紹介した1995年「図書」6月号「石井桃子さんに聞く」僅少在庫あります。希望の方に差し上げます。なくなった場合は「容赦を」。

「大型絵本」は 百花繚乱

先日名古屋の古本の古本の大市に出かけたところ、市場に福音館の「大型絵本」(11点まとめて)が出品されていた。最初、ぼくはこれに入札するつもりなどまったくなかったのである。しかし、会場を一回りしたのだが、めばしい子どもの本の出品がほとんどなかった。わずかに目についたのが、すばる書房の「月刊絵本」のバックナンバー、70冊ほどの出品だけだった。

今回はこれに絞って応札しようと思つたのである。しかし、これはたぶん、競争相手が多いだらうし、落札するには相当高い値段を付けなければ無理かな、と感じた。

もし落札できなかつたことを考えて、せっかく手間暇かけて名古屋まで来ているのだからと思つたら、急に「大型絵本」にも札を入れてみようと思つたのである。

結果は、ぼくとして思い切り高く値段をつけたつもりだった本命の「月刊絵本」が落札できず、どちらでもいいやと思つていた、福音館の大型絵本11冊が落ちてしまったのだ。

送られてきたものを見て、ちよつと驚いたのだが、この11点の大型絵本は、すべてが新品だったことである。

こういふのはどういうルートをとって古本の市に出品されるのだろうか？という疑問が湧いてきた。

ぼくなんかが思いつくことは、倒産した
 新刊書店の債権者が流すのかもしれないと
 いうことぐらいである。でも、普通の絵本
 とちがい1冊八千円以上するし、ガサ張る
 大型絵本であるから、これを在庫する書店
 などあるはずもないと思うのである。
 ぼくなどにはうかがいしれない、それな
 りの裏事情というものがあるのかもしれない
 だが、不思議なことである。

こんなことで、なんとなく仕入れてしまっ
 た大型絵本であるが、「さあ、売るぞ！」
 という気構えも持てないし、はたして、こ
 の大型絵本は売れるものだろうか？と少々
 心配にもなってきた。

ちなみに絵本は「かばくん」「ぐるんぱ
 のようちえん」「ぐりとぐら」「はじめて
 のおつかい」「おおきなかぶ」「ぞうくん
 のさんぽ」「ぐりとぐらのおきやくさま」
 「こすずめのぼうけん」「きよだいなきよ
 だいな」「せんたくかあちゃん」とそれと、
 「そらめめくんのベッド」(これのみ、す
 でに売り切れ)の11冊。

どなたか、ご入用な方いませんか？ピッ
 ポ古書クラブがつけた価額は一冊6300
 円(消費税込み)ほぼ新品。もし買って
 いただけるのでしたら、価額はさらに相談
 (値引きします)に応じます。

思い出した

福音館書店との論争

それよりも、この福音館の大型絵本を落
 札したことで、3年ほど前に福音館に「な

ぜ大型絵本を出すのか」こちらの疑問と意
 見を交えて、このピッポ新聞紙上で福音館
 書籍編集部長と公開質問状という形で論争
 したことを思い出した。

あのとき、ぼくの問題提起の一つとして、
 子どもへの大型絵本を使った「読み聞かせ」
 は、若いお母さんたちに「読み聞かせ」と
 いうものが、誤解されるのではないかとい
 う危惧だったが、残念ながら、それは当たっ
 ていたようだ。

いまや、「読み聞かせ」とは図書館など
 で、おおぜいの子どもたちを相手にして、
 大型絵本で読み聞かせるものだと思ってい
 る人も多いようである。

それが証拠には、市立図書館の新刊の受
 け入れの検品にいったときなど、時々新し
 い大型絵本を目にすることがある。図書館
 が購入するということは、それなりの利用
 者からの要望があるのだろうか？

今では結構おおくの出版社から大型絵本
 は出版されているようである。そこでどん
 な出版社から大型絵本が出版されているの
 か調べてみた。

参考にしたのは静岡県立中央図書館のホー
 ムページである。それによると、3月5日
 現在、県立図書館に入っている大型絵本は
 143タイトルだった。しかし、これが出
 版されている大型絵本のすべてかはさだか
 でないが、おそらくほとんど大型絵本を網
 羅しているのではないだろうか。

こうして一覧表にしてくれてみると、そ
 こからいろいろのことが想像できて、なか
 なかおもしろい。

まずは県立中央図書館に二つほど苦言を
 言いたい。

一つは国立国会図書館でもあるまいし、
 片っ端から資料として大型絵本を買い揃え
 る必要性が何処にあるのだろうか。

もう一つは「The very hungry
 caterpillar・はらぺこあおむし」などの
 英語版(洋書)の大型絵本まで購入してい
 るが、余程予算が潤沢とみえる。洋書の大
 型絵本の購入の必要性和洋書の大型絵本購
 入したことの司書としての見識を一度お聞
 きしてみたいものである。

そうそう、こんなにたくさん大型絵本
 を購入した、司書としての見識もお聞きし
 たいな。

大型絵本は現在 19社から143点が

この表によると、大型絵本を現在出して
 いるところは、19社(国内)あるようだ。
 点数の多い順番から掲げてみる。

メイト(23点)チャイルド本社(24点)鈴
 木出版(16点)ポプラ社(15点)偕成社
 (13点)福音館(12点)これにほるぷ出版、
 岩崎書店といったところがつづく。

出版点数の一番と二番のメイトとチャイ
 ルド、鈴木出版は、保育園・幼稚園に出入
 りする保育業者である。これにこどももの
 も社(福音館の代理店)を加えてみると、
 見えてくることがある。

大型絵本はどうやら保育業者によって、

保育園や幼稚園に、普及されているようである。それと、公立図書館などが主な購入先だといえるだろう。

では、どんな作品が大型絵本にされているかを見てみよう。やはり各出版社とも過去に自分のところで出した代表的な絵本で、子どもにも人気があり、定評のある絵本が多い。

メイトだけは出版傾向が少し違うようで、グリムや日本の昔話がほとんどで、これは多分、大型絵本が幼保の現場で売れるということが解ってきたので企画して売り出したのだらう。絵も文も見たいところ、ぼくだったら絶対買わないな。

ちょっと驚いたのは「ちびくろさんぼ」(現在は品切れ・人気があったんだね)が、瑞雲社から大型絵本として出されていたことである。瑞雲社からは今度「ちびくろさんぼ」の3番がでるそうだが、それにしても瑞雲社は「ちびくろさんぼ」で随分儲かったんだらうな？(これは余分なこと)

では、一番最初に大型絵本をつくったところは？というところ、正確でないかも知れないが、調べた範囲では1994年の偕成社の「はらへこあおむし」ではないだろうか。大型絵本の多くは2000年代になってから出版されたものが多いようである。

値段が安いのはポプラ社の「ありとすいか」などの4988円(消費税込み)で、高いのはチャイルドの「きょうりゅうつきよ

うりゅう」10500円(消費税込み)のようだ。

それにしても、大型絵本はつきつきに出版されていて、どうやら出版社にとってはドル箱の商品であるようで、福音館書店でも『ぐりとぐらのえんそく』など近々新たに3点が加わるということである。

ここまで書いてきて、ふと思ったのだが、絵本そして図書館の先進国である欧米では、このような大型絵本が読み聞かせ用として出版や購入が盛んなのだろうか？

それと、亡くなった石井桃子さんは大型絵本を読み聞かせに使うことをどんな風にお考えだったのかをお聞きしたい気持ちを抱いたしだいである。

ともかくにも、「読み聞かせ用大型絵本」は、百花繚乱である。

ねー、この本読んだ

『アイヌの昔話より セミ神さまのお告げ』
(宇梶静江・古布絵制作・再話 1365円 福音館書店)

6代の世を生きたおばあさんが、歌で大津波の来ることを予言したが、海辺の村の人びとはこれを聞かずに滅んでしまうのである。6つの地獄に落とされたおばあさんであったが、セミの幼虫になって、別の神さまによってあけられた穴を伝わってはい

だしてきて……。



作者の宇梶さんは古い布へアイヌの伝統の刺繍で絵を描くことをあみだした。この絵本は場面によっては種類の違った布を組み合わせて刺繍で描いている。それが迫力となり、津波の場面や村の全景を描いた頁など、とても素晴らしい。話も、アイヌの人たちの自然や年寄りを敬って生きて来たことが伝わってくる。これは『シマフクロウとサケ』につづく2作目。

『にいさん』(いせひでこ・作 1575円 偕成社)



これは、弟テオとの関係を通して、ゴツホの生きざまを描いた絵本。ゴツホは生きていた間はだれからもその絵を評価されることがなかった。貧乏と悲嘆のうちで生涯を終わってしまったようにみえるが、この絵本はその人間的苦悩が伝わってくる。作者のゴツホによせる気持ちがこの絵本を生み出した。